

EXPO'70 基金 2018年度助成金贈呈式

大阪万博の開催理念にふさわしい助成

関西・大阪21世紀協会は、独立行政法人日本万国博覧会記念機構から日本万国博覧会記念基金(EXPO'70基金)事業を承継して5年目の今年6月11日、リーガロイヤルNCBにて初めて助成金贈呈式を行いました。2018年度は、国内外の合計42事業(47事業採択後に5事業が辞退)に対して総額7,645万円を助成。そのうち国内外から37団体(約80人)が贈呈式に出席し、当協会の堀井良股理事長より助成金の目録が手渡されました。

堀井理事長は主催者挨拶で、「EXPO'70基金の存在や活動について多くの人々に知ってもらおうと同時に、1970年の大阪万博の開催理念に沿ってより良い助成事業を行っていくため、贈呈式をさせていただいた。大阪万博の理念は「人類の進歩と調和、だったが、21世紀の今日になっても世界情勢は激動し、人々は分断と紛争に悩まされている。そうした中であって、大阪万博の開催理念を継承する意義はますます強くなっている。今後も文化の多様性を包摂しつつ、地域社会の平和に貢献するEXPO'70基金ならではの助成事業に、一層力を入れていきたい」と語りました。

目録贈呈に続いて、第1審査会審査委員長の杉原充志氏(羽衣国際大学 現代社会学部教授)による審査総評が行われた後、2018年度の助成団体である認定特定非営利活動法人ミュージック・シェアリング(五嶋みどり理事長)と、特定非営利活動法人パンゲア(森由美子理事長)により、活動の事例発表が

行われました。ミュージック・シェアリングの事例発表では、五嶋みどりさんが海外の若手演奏家



贈呈式会場風景

贈呈式に参加した37団体と主催者、審査委員



とカルテットを組んで演奏が披露され、参加者は眼前の迫力ある生演奏に心を奪われました。また、第2部の交流会では、2018年度の助成団体が会場内にブースを設け、日頃の活動を紹介。審査委員の先生方からは、「直接交流する機会を得て、生きた助成となっていることが実感できた」と、この贈呈式が高く評価されました。参加者たちが情報交換するなど和やかな交流が行われました。



贈呈式後の交流会風景

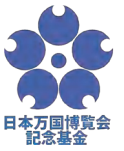
重点助成事業を新設

EXPO'70基金事業では、2018年度からは助成事業の原点に戻り、万博の成功を記念するにふさわしく、「日本万国博覧会開催の意図*」の趣旨に適った国際相互理解の促進に資する活動に助成対象を絞り込んで支援することとなりました。とりわけ大きな助成効果が期待でき、EXPO'70基金事業のシンボルとなる事業に上限金額1,000万円まで助成できる「重点助成事業**」制度を新設。「万博ならではの」「万博だからこそ」といえる事業を採択することで、他の助成事業とは異なる独自性を打ち出すようにしています。

*日本万国博覧会開催の意図(抜粋)

日本万国博覧会がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多角的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にも進歩が望まれなければならない、という「調和的発展」の精神でした。これは東洋思想の「和」の心を現代世界に呼び戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものでした。

**2018年度に唯一採択された重点助成事業「1970年日本万国博覧会がUAEに及ぼした影響などの研究とその文書化(事業者: Brownbook / Cultural Engineering) 交付決定額700万円」は先方の辞退により、助成は見送られました。



審査総評

万博理念に適っているかどうかを最重視

2018年度は助成対象を「国際相互理解の促進に資する活動」に絞り込んだことで、助成を受けようとする団体の活動には、昨年度以上に国際性を伴うことが必須条件となり



杉原充志氏(羽衣国際大学 現代社会学部教授)

ました。そのため当初は申請総数が減ってしまうのではないかと懸念されましたが、実際は例年並みの211件の申請がありました。また、申請段階で「重点助成事業(上限1,000万円)」と「一般助成事業(上限300万円)」の選択制にしたことにより、申請者の方々にとってはどちらの助成を受けようか迷われたかもしれません。結果は申請総数211件(うち海外26件)のうち、2割近い39件が重点助成に、172件が一般助成の申請にチャレンジされました。

それらの審査にあたっては、申請締切後の2017年10月～11月の2か月をかけて事務局にて申請要件を満たしているかどうかチェックし、それを通過したものが審査対象となりました。そうして第1審査会(審査委員長・杉原充志氏)と第2審査会(審査委員長・同志社大学経済学部教授 河島伸子氏)それぞれ6人・計12人の審査員が、重点助成については全ての申請書を読み込み、大阪万博の開催理念にふさわしいものを推薦。一般助成については、二つの審査会に振り分けて採点・評価しました。重点・一般合わせると、一人の審査委員が百数十件の申請書を精査したことになります。審査員の方々には本当にご苦勞をおかけいたしました。

採択の可否は各審査員の合計点で決めましたが、その際、大阪万博の開催理念に適っているかどうかを最重視し、世界の調和ある発展に貢献できるかどうかを十分に審議しました

採択の可否は各審査員の合計点で決めましたが、その際、大阪万博の開催理念に適っているかどうかを最重視し、世界の調和ある発展に貢献できるかどうかを十分に審議しました

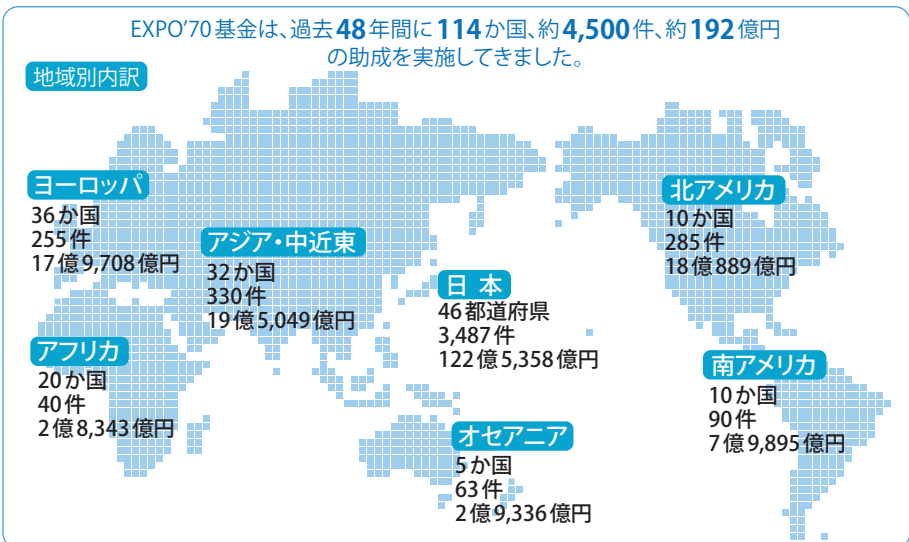
ので、合計点が採択ラインに達していなくても、その趣旨を十分満たすものであれば採択の対象としました。最終的には重点助成事業1件(700万円)と一般助成46件の計47件(うち海外10件)が採択され、助成総額は8,900万円で、当初予定していた総額9,200万円の範囲内に収まりました(採択後、重点助成事業1件と一般助成4件は事業が実施されず辞退)。採択率は重点助成が2.6%、一般助成は26.7%で、とくに重点助成は非常に高い競争率となりました。

2018年度の審査を振り返ると、申請団体には過去の活動実績や申請書の記載の巧拙というより、助成対象となる活動内容や目的が大阪万博の開催理念や当基金の助成の趣旨にどれだけ合致しているかが選考の最大のポイントとなりました。今後も多くの団体のチャレンジをお待ちしています。

2018年度に採択された47件の国別内訳()内は件数



EXPO'70基金は、過去**48**年間に**114**か国、約**4,500**件、約**192**億円の助成を実施してきました。



事例紹介 助成団体を代表して、2団体の活動が紹介されました。

認定特定非営利活動法人 ミュージック・シェアリング

「本物の音楽」に触れてもらうプログラム

ミュージック・シェアリングは、1992年にヴァイオリニストの五嶋みどりさんが文化・芸術の振興と子供の健全育成を目的とした「みどり教育財団東京オフィス」を設立したことにはじまり、2002年に現法人名に組織変更されました。以来、日本および開発途上国の子供たちに音楽を通して豊かな心を育むとともに、音楽家の社会貢献活動

に対する理解を深める場を提供しています。

具体的には、五嶋さんをはじめとする協力アーティストが小学校などを訪れてコンサートを行ったり、楽器に触れる体験をしてもらったりする「訪問プログラム」、養護学校や特別支援学校と協力し、音楽大学の学生や卒業生を派遣して楽器の演奏指導を行う「楽器指導支援プログラム」、五嶋さんが世界からオーディションで選ばれた若手

演奏家とカルテットを組み、アジアの国々を訪れて西洋音楽に触れる機会の少ない子供たちの前で演奏を披露することで、子供たちの創造性や相互理解を育み、明日への夢を抱ききっかけ作りを提供する「ICEP（インターナショナル・コミュニティー・エンゲージメント・プログラム：愛称アイセップ）」です。2006年からベトナム、カンボジア、インドネシア、モンゴル、ラオス、バングラデシュ、ミャンマー、ネパール、インドの9か国で訪問演奏を行いました。ICEPには、音楽による社会貢献とはどのようなことなのかを若手演奏家と現地の音楽学生とともに実体験を通し

て認識してもらう意図もあります。

贈呈式の事例紹介では、五嶋さん率いる「ICEPカルテット」が演奏を披露し、参加者一同が、ミュージック・シェアリングが理念に掲げる本物の音楽*に聴き入りました。

*ミュージック・シェアリングが掲げる「本物の音楽」とは、完成度・芸術性の高い音楽と、音楽の本質（音楽を学ぶ者が自らの演奏する音楽によって他者に何をもたらすことができるのか、または何ができないのか）を経験的に知ることの二つを指しています。



事例紹介をした中村皓人氏(左) (ミュージック・シェアリング)



ICEPカルテットによる演奏 (左端が五嶋みどりさん)

特定非営利活動法人 パンゲア

子供たちが多文化共生の楽しさや尊さを体験

パンゲアは、2001年の9・11(米国同時多発テロ事件)をきっかけに、森由美子氏と高崎俊之氏(副理事長)によって設立されました。当時、二人はマサチューセッツ工科大学の研究者をしており、世界貿易センタービルに激突したユナイテッド航空93便への搭乗を9・11の3日前に仕事の都合でキャンセルしたため命拾いをしました。

「人類の進歩と調和」を掲げて開催された大阪万博以降、世の中は技術の進歩によって格段に便利になりましたが、「人類の調和」という観点ではまだまだです。国家、文化、宗教の違いや経済格差などによるさまざまな問題が深刻化・過激化している現状にあって、パンゲアは世界の子供たちがつながりを感じられるプラットフォームをつくり、子供たちの国際交流を通じて平和な世界の構築に取り組むことをミッションとしています。そのために自分たちでICT(Information and Communication Technology：情報通信技術)を使って言葉の壁を克服するソフトウェア開発も行い、世界各国の拠点に集まった子供たちによるインターネットを介した国際交流に取り組んでいます。

今回、助成を受けた活動は、2018年7月22～29日に実施される「児童のための京都異文化サマースクール(Kyoto Intercultural Summer School for Youths)で、「KISSY(キッシー)」の愛称で呼ばれています。2016年夏のKISSYでは、京都大学に世界各国から30数人の子供たちが集まり、五つのチームに分かれて「夢」をテーマにボール紙や絵の具などを使った工作作品を共同制作しました。「ゲンゴロウ」と名付けられた多言語翻訳システムを使

い、それでも意思疎通できなければあらゆる手段を使ってお互いの考えを理解しようと努めます。こうして子供たちは、言葉や文化、価値観が

違っても、お互いつながりあうことが可能で、その尊さに気づきます。KISSYは、ユネスコの文化多様性条約にある「多文化共生ができなければ、世界は持続可能ではない」という考えに基づいた活動で、大阪万博の理念の一つである「人類の調和」を促進するものです。



森由美子氏(左) (パンゲア 理事長)



児童のための
京都異文化サマースクール
(2016年8月)



写真提供:パンゲア

2018年度日本万国博覧会記念基金 助成先の事業紹介

チャイルド・エイド・アジア2018

事業者：特定非営利活動法人リトル・クリエイターズ

交付決定額：210万円

実施期間：2018年5月20日 実施地：東京都 サントリーホール大ホール

シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピンから音楽的才能に恵まれた子供を招聘し、日本とアジアの子供たちが互いに協力しながら、言葉の違いや経済的格差を越えて一つの舞台に立ち、最高のコンサートを作り上げていく「チャイルド・エイド・アジア」を5月20日(日)に東京・サントリーホールで開催しました。

秋篠宮妃殿下、在日本インドネシア大使のご臨席を得て、約900人にご来場いただき、総勢95人の子供たちが、クラシックやポップスなどさまざまなジャンルの19曲を競演。日本インドネシア国交樹立60周年を記念して、インドネシアの曲も紹介しました。また、児童養護施設「石神井学園」の5人がシンガポールの児童とともに司会を務め、「聖園子供の家」の子供たちが製作した美術作品が舞台や劇場を飾りました。

本事業は、さまざまな生活環境で生きるアジアの子供たちが互いに助け合いながら音楽や美術を通じて自分を表現する場となり、彼らが夢と希望を持って生きていけるコミュニティーを育むことを目指しています。



撮影：高橋正美

ポール・クローデル生誕150周年記念『^{しゅす}繻子の靴』公演事業

事業者：京都造形芸術大学舞台芸術研究センター

交付決定額：160万円

実施期間：2018年6月9日～10日 実施地：静岡県 静岡芸術劇場

フランスの劇作家、詩人、外交官で、大正年間に大使として日本に滞在したポール・クローデル(1868～1955)の生誕150周年を記念して、6月9日、10日に静岡芸術劇場においてクローデルの代表作である長編戯曲『繻子の靴』全曲版が、SPAC-静岡舞台芸術センターとの共同主催で上演されました。『繻子の靴』全曲版は、長年、日本と世界のフランス演劇研究をリードしてきた渡邊守章さんによる翻訳・演出で、2016年に京都芸術劇場春秋座で本邦初の上演が実現しましたが、今回の再演は、初演時のものを基本に新たなキャスト・スタッフも加わり再創作されたものです。上演時間が8時間を超えるという超大作にもかかわらず、2日間の公演は両日とも満席(入場者数591人)で、多くのメディアに高評価のレビューが掲載されるなど、大きな反響がありました。この歴史的な公演は関西・大阪21世紀協会(日本万国博覧会記念基金)からの助成によって実現されたものですが、秋には基金がかかげる理念である国際交流という視点から、「クローデルと日本」をテーマにした国際シンポジウムを、今公演と一体の事業として京都で開催する予定です。



撮影：井上嘉和

ヴィオラスペース2018 vol.27 第4回東京国際ヴィオラコンクール

事業者：東京国際ヴィオラコンクール実行委員会

交付決定額：210万円

実施期間：2018年5月26日～6月8日 実施地：東京都・大阪府・愛知県・宮城県

世界にも類を見ないヴィオラ音楽の祭典「ヴィオラスペース」の一環として開催。アジア太平洋地域における唯一のヴィオラ単独の国際コンクールであり、ヴィオラを通して、日本発信の世界へ向けた文化交流を目的としています。

2017年2月から出場者の募集を行い、世界の21か国と地域から83人の応募がありました。予備審査を経てコンクールには32人が参加、第1次、第2次、本選を経て3人の入賞者が選ばれました。期間中には、審査以外にも、ヴィオラスペースの流れを汲んだワークショップ、ガラ・コンサート(大阪、名古屋、仙台公演含む)が同時開催され、のべ2700人が来場しました。競い合うだけでなく、出会い、交歓し合う場となることを目指しており、次の審査に参加できなかった出場者には、審査委員との面談、ワークショップ、ガラ・コンサートへの招待といった機会が提供されます。また、入賞者は来年、再来年開催のヴィオラスペースにゲストとして招待され、その成長ぶりが披露されます。



第1位入賞：ルオジャ・ファンさん(中国)本選より



入賞者と審査委員

撮影：藤本史昭